

『野群載』の准擬牒と同様、受領した国郡はあくまでも宛所の一つにすぎないので、新しい遊牒及び返抄を作成する必要がない。『延喜式』に「前所に牒を通す」とあるように、そのまま次の国郡に通送されると考えられる。

今回の報告では、伝馬制を利用するため、事前に往来者の情報を伝える遊牒を路次の郡に送るという先行研究の推測を史料で裏付けた。伝馬の情報伝達に際して、国府から国府へ、そして国府から郡家へという従来のモデルではなく、路次の郡から郡（国府所在の郡は国府）へと回されていく。遊牒の宛所が複数であるのはそのためであり、また往来者が遊牒を携帯する専使を派遣しないと考えられる。今後とも新たな視点から、日唐の制度比較により伝馬制の実態を考察していきたい。

国造系譜の成立と展開

—『紀伊国造次第』を中心として—

鈴木 正信

紀伊国造は、瀬戸内海に接する紀伊国名草郡（現在の和歌山県和歌山市・海南市）に本拠を構え、いわゆる大化前代には対外交渉の面で活躍を見せた。そして律令制下においても存続し、時には名草郡大領を兼ね、また日前国懸神宮に神職として奉仕してきた。その沿革を示す系譜史料としては、『国造次第』（紀俊之氏所蔵・和歌山

平成一七年度早稲田大学史学会大会報告

市立博物館寄託）と『紀伊国造系図』（『続群書類従』所収、以下では群書本とする）がある。前者は忠雄（六十七代国造）までを終始同筆で列記する冊子本であり、忠雄の代すなわち天文十九（天正十八年（一五五〇）〜九〇）頃の成立と考えられている。一方、後者は昌長（七十代）までを記載する横系図で、奥書から延宝八年（一六八〇）の書写であることが知られる。これらはともに広く知られ、先行研究において頻用されてきた。しかし、両者の記載には相違する箇所がいくつか存在する。たとえば、①忍穂（十九代）と牟婁（二十代）、②豊島（二十七代）と吉継（二十八代）を、それぞれ『国造次第』では兄弟とするのに対し、群書本『紀伊国造系図』では親子としている。そこで本報告では、どちらの記載に信を置くべきであるのか（どちらが本来の記載を伝えているのか）について、『紀伊国造系図』の書写過程を手がかりに検討を行った。

群書本『紀伊国造系図』は、その解題によれば、「日前宮神主紀伊国造系図」（丸山可澄編『諸家系図纂』（元禄五年（一六九二）成立）所収）を底本にしているという。『諸家系図纂』には多くの写本が伝存しており、どれが群書本の底本であるのか判然としないが、ここでは国立公文書館内閣文庫所蔵の一本（以下、系図纂本）に注目したい。この系図纂本は、行義（三十九代）尻付「散位従五位下」の「散」の字形が「敬」に酷似している。それに対し、群書本のこの部分は「敬位従五位下」となっている。これはおそらく「散」を「敬」と誤写したものだと思われることから、群書本は系図纂本と

底本とした可能性が高いと言える。また、系図纂本・群書本に見られる記載様式の特徴としては、書名を「紀伊国造系図」とする点、冒頭に造化三神を置く点、天道根命（初代国造）に長大な尻付を施す点、天道根命から等与見々（九代）までに「命」を付す点などが挙げられるが、これらは『紀伊国造系図』（紀俊行氏所蔵・和歌山市立博物館寄託、以下では市博本とする）と全く共通している。よって、市博本・系図纂本・群書本が同一の書写系統に属することは間違いない。ただし、市博本は俊範（七十二代）尻付の途中までが同筆であり、冒頭から同筆の部分の中で最も新しい年紀は宝永三年（一七〇六）であるから、およそこの頃に成立したものと見られ、延宝八年（一六八〇）に書写された系図纂本の底本たり得ない。とすれば、市博本と系図纂本には共通の原本（以下、未見本）が存在し、両者は兄弟関係にあると見るのが妥当であろう。

さて、市博本・系図纂本・群書本『紀伊国造系図』と、『国造次第』の記載はおおむね一致している。よって『国造次第』の記載内容は、のちに未見本、さらに内閣系譜纂本・市博本『紀伊国造系図』へと踏襲され、最終的には系図纂本を底本とした群書本『紀伊国造系図』に書写されていったと考えられる。そこで、上記①②③の相違点を見てみると、『国造次第』は①牟婁（二十代）尻付を「忍穂弟」とし、市博本『紀伊国造系図』もこれと同じであるのに対し、系図纂本・群書本『紀伊国造系図』は「忍穂男」としている。同じく②吉継（二十八代）尻付も『国造次第』・市博本『紀伊国造系図』

には「豊島弟」とあるものが、系図纂本・群書本『紀伊国造系図』には「豊島男」とある。したがって、冒頭で示した『国造次第』と群書本『紀伊国造系図』の相違は、前者から後者へと記載内容が書写されていく過程で生じたものであり、基本的には『国造次第』の記載に信を置くべきであると考えられるのである。なお、このような記載の変化が、単純な誤写であるのか否かについては即断を避けたい。というのは、たとえば系図纂本が作成される際に考証が加えられ、世系を延ばすため意図的に「弟」を「男」に変えた可能性なども否定できないからである。この点は歴代国造の継承順と合わせて、別の機会に改めて考察を加えることとしたい。

本報告で取り上げた群書本『紀伊国造系図』のように、系譜史料には校訂の不十分なものが少なくない。系譜史料を有効的に活用するためには、その成立・書写過程にまで立ち戻った周到な史料調査が必要不可欠であると言える。

近世の村の鉄砲 ―武器から「道具」へ―

中西 崇

近世の村に少なからぬ量の鉄砲（火縄銃）があったことは、塚本学氏によって明らかにされている。塚本氏は、作物を荒す獣害対策に鉄砲が必要であったため村に鉄砲があったのであり、村の鉄砲は武器ではなく「農具」であったとした。